

## 巻 頭 言

学習指導要領の改訂はおよそ 10 年ごとに行われる。教育再生の取り組みが加速する中、キーワードの 1 つに「アクティブラーニング」がある。

先日、東北地方のある国立大学の学長がこれについて「大学のみならず、小・中・高等学校においても重要な要素になりそうである」と述べていた。しかし「アクティブラーニング＝主体的・協働的に学ぶ学習」はむしろ高等教育にこそ必要な改革の 1 つではないかと思われる。

幼稚園や小学校では「アクティブラーニング」は重要と認識され、すでにこれに取り組んできている。たとえば現行の小・中学校学習指導要領の算数・数学の教科の目標には、「算数的活動」「数学的活動」という文言があり、これらは算数・数学に対して主体的に取り組む活動のことである。主体的な活動を通して知識や技能、考え方を身につけさせること、同時に児童生徒を「主体的に数学を学ぶ人間」にすることが目標であると示されている。すなわち、主体性や協働性は教育の手段であると同時に、目的的な能力・資質としても、すでに位置付いているといえる。これは他教科についても同様である。

課題は、アクティブラーニングが求める能力や資質を、各教科固有、および教科を横断する汎用的な能力ととらえ、到達目標を具体的レベルで示すこと、そしてこれを基に評価し、より一層指導内容と方法を充実させることであると考ええる。新しい用語に振り回されることなく、これまでの取り組みを見直し、一層の充実を図っていくことこそが重要である。

初等教育学科は『「次代を担う子どもたちを育てる教育者」を育てる学科』である。残念ながら学生は直近の経験から「授業は教師が説明するもの」と捉えている傾向が強い。この概念をうち砕くためにも、学科におけるアクティブラーニングの授業を充実させ、幼児・児童の主体性や協働性をはぐくむ教育者を養成することが本学科の使命である。

さて、本学科も開設 10 周年を迎える。昭和 33 年度からの短期大学部初等教育学科（後に子ども教育学科と改称）は平成 22 年 3 月まで存続。平成 18 年 4 月には人間社会学部初等教育学科が開設された。以降、保育士、幼稚園教諭および小学校教諭を養成してきた。

教育者には、どのような時代においても求められる資質・能力とともに、時代の変化に即した対応のできる資質・能力が必要である。本学科の基本は「建学の精神」である「愛と理解と調和」を体現し次代をリードする実践的なリーダー、「清き気品」「篤き至誠」「高き識見」（校訓三則）をもつ女性の育成である。同時に、次期学習指導要領の改訂で実施される「小学校英語の教科化」や子どもの発達の早期化、中 1 ギャップ等の課題に対応する「小中一貫教育学校」の制度化、理数教育の充実、就学前教育の充実などに対応できる教育者の育成をも視野に入れ、新しいカリキュラムの編成に取り組んでいる。

本「学苑」発行に当たり、掲載の研究論文等が、保育所や幼稚園、小学校において活用され、現場の教育に役立つことを願っている。

（初等教育学科長 齊藤規子）